



「体験」の力

体験格差という言葉が話題になるなど、かつてなく子ども・若者の「体験」の価値に注目が高まっています。何らかの効果を目的として行う体験を「体験活動」と呼びますが、専門的には生活・文化体験活動、自然体験活動、社会体験活動の大きく3つに分類されるものです。

生活・文化体験活動は例えば放課後に行われる遊びやお手伝い、野遊び、スポーツ、部活動、地域や学校で行われる行事などを指します。自然体験活動は、例えば登山やキャンプ、ハイキング等といった野外活動、星空観察や動植物観察といった自然・環境に関わる学習活動です。社会体験活動には、ボランティア活動や職場体験活動、インターンシップ等が挙げられます。若い時期のこういった活動を通して、私たちは社会を生き抜く力の基礎的な能力を育てていることが明らかになっています。

また、体験活動は自分自身との対話、実社会との関わりを考えるきっかけにもなります。例えば、ボランティアとしてまちを清掃し、地域の課題を考えること。自然の中で、これまで触れたことのない物に触れ、五感で感じ、その存在を認めること。コロナ禍をきっかけに「疑似体験」や「間接体験」ができる環境が急速に整備されましたが、本来の体験活動は地域の人々や自然環境と密接に関わる中で、自ら生き抜く力を育む活動です。

神奈川大学「体験型研修」

とはいえ体験は、一般には分野やプログラムごとに独立して理解されており、体験という枠組みに対して「何かやってみよう」と気軽にアクセスする若者は多くはありません。

「直接体験」の持つ力を学生に提供したい。なるべく多くの学生に届く仕組みを作りたい。神奈川大学がそんな思いで2020年に立ち上げた共通教養科目「体験型研修」は、体験をキーワードに様々な科目を関連付け、一つのプログラムとして整理しており、わくわくする魅力にあふれています。

さらにそのプログラムを別の角度から見つめたとき、神奈川県豊かな教育資源を生かしたまちとの出会い、そして参画の扉にもなっていました。



(上) 小田原市内の農園で、玉ねぎをはじめとする野菜の収穫に取り組む大学生たち。
(中) 収穫した野菜を「いただきます」。特にトマトが絶品だったそう
(左下) 鹿や猪といったジビエについて学び、食べさせていただく
(右下) 羽釜で炊く県産米「はるみ」

「体験型研修」プログラム一覧（ウェブサイトより）



ケーキ屋・パン屋になろう	横浜まち歩き	食育わくわく体験
法的交渉入門プログラム	ひらめき鑑賞学	みどりの鎌倉
基礎から始めるゴルフ	はじめてゴルフ	マリンスポーツの多種目実践
鎌倉で体感！ウインドサーフィンの魅力	基礎から始めるスノースポーツ	五感で味わう北海道の「Japow」
野外での自然観察	横浜内港でのシーカヤック実習	囲碁

※上記の科目は2024年度開講プログラムです。（年度によって変更の可能性あり）

まだ知らない、 「神奈川」と出会う

「体験型研修」は、生活・文化体験活動、自然体験活動、社会体験活動を組み合わせて構成していますが、それぞれのプログラムの中で地域の人材と関わる場面を意識的に設定していることも特徴です。学生、もとい若者がまちづくりの最初のきっかけに出会う「参加」の場として機能する面にも注目しておきたいところです。

みどりの鎌倉

「授業の目的」より：

人々が暮らす身近な地域の環境や風景の保全って、いったい何をしたらいいのだろう？
鎌倉を舞台として、現地を歩き、観察し、そしてボランティア活動で汗を流しながら、その答えを一緒に考えてみよう！という体験型の授業です。

「実習場所」：

【神奈川県鎌倉市】

公益財団法人鎌倉風致保存会のお世話になります。

横浜内港でのシーカヤック実習

「授業内容」より：

神奈川大学と公益財団法人帆船日本丸記念財団・NPO法人横浜シーフレンズの連携事業として実施され、シーカヤックを通じて海とふれあい・感じ・学ぶ、有意義な体験授業であり、受講生が学外の社会人との接点を有効に活用する場を提供する授業でもあります。

囲碁

「授業の目的」より：

囲碁を通し論理的思考力(ロジカルシンキング)の向上を目的とし、ルールを習得して、最終的に19路盤で対局できるようにする。
囲碁の歴史や、平塚市の文化振興の一助として囲碁が深くかかわっていることについても知ることで、神奈川県で学ぶ知識人としての教養を身につける。



プログラム例

プログラムの一部、「食育わくわく体験」（実施要項より）。実施にあたって、地域コーディネーターが間に入って調整することで、体験の充実度を高め、学ぶ価値を底上げしています。

プログラムは全てウェブサイト上で公開されています。



集中・時間外科目（横浜キャンパス・みなとみらいキャンパス開講科目）

[「体験型研修実施要項」](#)

食育わくわく体験

～おいしい小田原を食す～

前期



主担当教員：中川 理絵 副担当教員：齊藤 ゆか／磯田 浩司

時間割コード：11FL010

開講科目名：体験型研修／－【食育わくわく体験】



おすすめポイント

小田原は知る人ぞ知る古くからのたまねぎの産地です。
たまねぎ収穫だけでなく、かながわブランド農産物に指定されている「小田原梅」の収穫も行います。
地域に根付いた体験を行いながら、分野・専門にとらわれない広い視野や考え方を一緒に学びましょう！

授業の目的

文系、理系問わずさまざまな専門分野の視点で「食・農業」をテーマに学びます。
専門の異なる教員がそれぞれの専門分野の視点から講義を行うため、多様な視点を身につけることができます。新たな学問への興味・関心のキッカケ、なりたい自分像のキッカケ、地域問題発見のキッカケなどたくさんのキッカケが詰まっているおトクな体験型授業です。

授業内容

全回対面で行います（大学で行う場合は土曜日2限）。
第2回から第12回は小田原市で農業・ワークキャンプ実習（合計3回）をします。
各実習後に振り返りのレポートを提出してもらいます。
第14回は学んだことを各自発表してもらいます。

日程

実習は土曜日または日曜日（5月と6月に計3日）

実習場所

神奈川県小田原市

持ち物・費用（予定）

【持ち物】

軍手、タオル、飲み物等
＊動きやすい服装（汚れてもよい服装）で！！

【費用】

自宅から現地までの交通費。各自の昼食代。
学研災付常賠償責任保険 340円



学生の声（2023年度）

ではやってみてどうだったのか、が気になるところ。
参加した学生の様々な声が公開されていますので、ぜひご確認ください。

[「パネル展☆食育わくわく体験～食でつながる小田原と横浜の学生～Part1」](#)

[「体験型研修～小田原で甘夏ミカン収穫と農機具体験～／お知らせ | 神奈川大学」](#)



地域で育った若者は、やがて地域で活躍する志を立て、人づくり、つながりづくり、地域づくりの道を歩みます。生涯学習、社会教育の専門職を育てる大学の社会教育課程は、そんな彼らが集まる場所。教育課程と自由な時間の間だからこそ成り立つ、この取組みが今、おもしろいのです。

神奈川大学社会教育課程の有志が運営する「かながわユースフォーラム実行委員会」では、新しい人、新しいこととの出会いを大切にしながら半年にわたり地域社会の課題解決を目指します。様々な学部へ属し、多くの県外出身者も含む学生が、はじめて「ひとづくり」、「まちづくり」に挑戦する緊張感。年に一度の実践報告「かながわユースフォーラム」では、多様な「かながわ」に触れた瑞々しい経験を伝えていました。



活動事例

かながわユースフォーラム2024

半年にわたるプログラムと、実践報告を生き生きと伝える報告書。若者と地域、まちづくりのコラボレーションの例が豊富に記載されています。ファイル全体のダウンロードも可能です。アイデアを探している読者のみなさん、必読です！

[note「【かながわユースフォーラム2024】報告書が完成しました！」](#)



かながわユースフォーラム実行委員会

上記について、それぞれの日ごとの活動報告が詳細に紹介されています。実習やふりかえりの中で、地域がどう関わり学生が何を感じたのか。若者の心の動きが伝わり、解像度が高まる記事は、コーディネーターとしての視野を広げてくれますよ。

[note「ユースの活動報告」](#)



社会教育課程のその後

社会教育課程修了者は、人を育てる専門職とされる「社会教育士（称号）※1」と「社会教育主事（任用資格）※2」を得ることができます。特に社会教育士は、2025年現在地域社会を支える新たな資格として人気が高まっており、多くの人材による様々なフィールドでの活躍が期待されています。

※1 社会教育士

2020年より、社会教育課程修了者が学習成果を広く社会に生かせるよう、新たに「社会教育士」と称することができるようになりました。市民の学びと活動を応援する専門職として期待されており、例えば、学校と地域の連携やコーディネート、子どもから高齢者、外国人、障がい者など多様な人や組織の活動の支援を行います。主な活動拠点として、公民館、図書館、博物館、青少年・女性教育施設、生涯学習センター、コミュニティセンター、スポーツ・文化施設等が想定されています。

※2 社会教育主事

都道府県や市町村の教育委員会におかれる、生涯学習・社会教育の「専門的教育職員」です。主に、市民の学習ニーズの把握、社会教育計画の立案と事業の運営、社会教育関係者に対する指導・助言、学校の求めに応じた助言を行います。

関係機関 リンク集

[「神奈川大学社会教育課程」](#)



[「社会教育士について：文部科学省」](#)



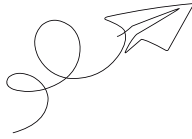
[「文部科学省」社会教育士note」](#)



[「神奈川社会教育士会」](#)



エディタース ノート 「神奈川」への雑感



それぞれの子どもの頃をふりかえりつつ、「体験格差」を考える大学の講義の一場面

横浜市六角橋に位置する神奈川大学横浜キャンパスのある講義を訪れたとき、その場の200名ほどの学生のうち半数程度が県内出身者で、もう半数は他都道府県出身者だと聞きました。若者の社会参画という文脈から考えると、この他都道府県出身の彼らにいかに地域が接点を持てるかということは大きな課題です。この一種のブルーオーシャンに切り込んでいるのが今回の「体験型研修」や、「かながわユースフォーラム」の事例だと捉えることもできます。

「体験型研修」のプログラムからは、体験は学生が様々な地域人材に出会う場になっていることがわかります。県外での活動も含め、その土地、その環境だからできる体験は、その地域にいる人との出会いであり、それこそがまちとの出会いそのものです。これは県内出身者にとっても、まだ知らない神奈川と出会うという意味で大きな意味を持つものと言えます。

彼らがまちを発見し、心が動き、思い出をつくり、あるいは帰属意識を持ち始めるとき、初めて地域は「居場所」になり始めるのではないでしょう。

一方で、地域の活動に取り組む多くの大学生が、卒業すると地元に戻ったり、就職して時間に制約が生まれたり…と、その地域から去ってしまうことを残念がる地域の声が多くありません。若者が地域を通り過ぎて行ってしまふ。築いてきた関係性まで卒業されてしまうようで、寂しさを覚えることは自然なことかもしれません。

ただ少し見方を変えると、彼らの長い人生の物語の1ページに、我が地域が登場し、自らもキャストとして出演する。そのことを想像すれば、地域の大人にとってはたとえ短い時間に感じられたとしても、やはりすばらしい出会いであることに変わりはありません。地域の活動に新陳代謝がもたらされるという意味でも、大切な機会としてつないでいきたいところです。

「地域」という言葉は曖昧です。例えば子どもは、最寄りの駅や小学校区として認識し、成長とともに行動範囲を広げる中で、地域のイメージを次第に区や市町村にまで広げていきます。

やがて大人になると、住居にかかる費用を払って生活するからこそ、もしかしたら小学生に近い視点に「地域」をダウンサイジングして捉えていくのかもしれませんが。

上記に比べると行動範囲の広い大学生は、近所に住んでいなくても、関心を持てば地域の活動にコミットすることができる、大げさに言えば「世界」が「地域」になり得る特別な年代です。そんな彼らにとって、実は神奈川県というサイズ感は、まちへの参加・参画の最初のステップとして非常にちょうどよい環境であると言えます。

今回の事例の活動のフィールドである神奈川県は、横浜を中心とした都会のイメージで語られることが多いですが、変化に富んだ地形、豊かな自然環境にも恵まれた地域です。

産業も様々で、企業も多く、交通機関も発達しています。文化的にも資源が多く、小さな県内の各地にご当地名物や「聖地」が山のように存在しています。昔を偲ばせる古墳を持ち、やがて古都や城下町を育み、開港の舞台となり、未来的な都市をも備える神奈川県は、四次元で捉えても無いものが中々見つからないほど充実した地域です。そしてそんな神奈川県だからこそ、抱える社会課題も日本の縮図と言える部分があります。

「体験型研修」の事例は、多様性に富む神奈川県のパテンシャルが生かされ、学生が知らない神奈川の姿を発見し、体験することにおもしろさがあります。「かながわユースフォーラム」では、それがさらに課題解決につながっていきます。

神奈川というフィールドでは、プログラムづくりの可能性は限りなく豊かです。学生と地域がどのように出会い、どんな活動をともにするか。

挑戦しがいのある「地域」、それが私たちの「神奈川」です。

(事務局職員 長南 悠太)